

十二因縁に於ける認識と存在の問題

山 本 啓 量

一 十二因縁は「触―受」を中心として前半と後半とに分
別せられ、触以前を認識論的体系、受以降を存在論的体系と
云うことができる。「触―受」は認識と存在との両者にまた
がる契機をなすものである。

触 phassa は根境識三事と合して tinnaṃ saṅgati 触あり
と云われ、根境識の主体と対象と方法とによつて認識が成立
する。十支縁起では「識↓名色―六入―触」と云い、九支縁
起では識↓名色は触としている。触は六内外入処によつて生
ずる六入触のことである。識と名色とは「識↓名色」の関係
にあり、「識と名色とによつて触あり。」とも云われている。
名色は五蘊のことであるから、触に五蘊に於ける触と六入に
於ける触とあることになる。相应部の蘊相应には五蘊の認識
の問題を、入相应には六入の認識の問題を取り扱っている。
六入に於ける触は「根境識三事と合して触あり。」とせら
れる認識論上の触であるが、五蘊について認識論的に考察す
れば、色の刺戟に対して受の受領があり、取相して意思し思

考することにより、了別に至る認識過程と見るべきである。
この時、色と受との間に触の介在が考えられ、触に縁つて受
あり、触に縁つて想あり、触に縁つて行ありとせられる。五
蘊に於ける色―受の間に触があるとすれば、触に於ける識と
五蘊に於ける識は相互に循環することとなり、認識による存
在の熾盛性を示すものと云うことができる。また名色 nāma-
rūpa は色受想行識の五蘊に相当せしめれば名は受想行また
は受想行識に相当する。識と名色の関係に於て名色は五蘊の
ことであるとすれば、識↓名色は五蘊の認識形態であると云
うことができ、名色は主体と対象とに相当し、識の方法との
合一によつて触の認識形態が成立するもの考えられる。識↓
名色に於ける循環性は識↓名色に於ける識と名に於ける識と
が、触を媒介として循環するものと云うことができる。これ
が四識住に於ける五蘊の熾盛性と云うべきであらう。因縁相
応に「如何なることを思量し企て慮るも、このこと識の定ま
る所縁なり。所縁あるが故に識の住あり。識の住の増長する

十二因縁に於ける認識と存在の問題（山 本）

時、未來に再有生するに至り、未來に再有生するとき、未來の老死愁悲苦憂惱有ず。」とあり。慮の能縁とこれに対応する所縁とによつて識住あり、識は認識のための条件であるとすれば、識住は認識の存在への転機を示し、よつて未來の存在としての再有が生するとせられる所以である。

触を本とする phassa-mulaka 縁起に六種あり、(1) 触によつて苦樂を生ず、(2) 触によつて受あり、(3) 触によつて愛あり、(4) 触によつて受あり、想あり、思あり、愛あり、(5) 触によつて受あり、受によつて愛あり乃至老死あり、(6) 無明触所生の所受触るれば無聞の凡夫渴愛生ず、之によりて行生ず等とある。これ等は触の認識を本として存在性の生ずることを述べているのである。

二 増一阿力品には「受によつて愛あり」「愛によつて受あり」とし、「受_↓愛」の循環關係を述べている。これは「触_↓受」の認識關係より愛の心理的存在の移行狀況をその循環の相互關係によつて示したものである。

原始經典には愛に至る縁起を説くと共に、愛を本とする縁起が説かれている。因縁相応や六処相応には、三事 and 合触_↓受_↓愛の縁起次第を示して愛を苦の集としており、また三事 and 合触_↓受_↓愛の縁起次第を示して愛の無余・離貪・滅によつて取の滅ありとし乃至老死愁悲苦憂惱の滅に及んでいる。すなわち三事 and 合触の認識に基づいた存在性の集滅を説いた

のである。イティブツタカには「愛は輪廻に走らしむ」と云い、ヴィナヤには「愛は再生を起す」と云い、四分律受戒度には「苦の本は受なり」とし、「愛本所生に縁りて欲と相応して愛起る」と云つてゐる。

雜阿二七八増一阿八には「触によつて受あり、触によつて想あり、触によつて思あり、触によつて愛あり」とすると共に、「五盛蘊は愛を縁となす」と云い、五取蘊_↓愛の相互關係を説いている。

因縁相応では、縁起の受_↓愛_↓取_↓有_↓生_↓老死の次第を説くと共に、「所取の法に於て味觀に住するものは、愛増長す所取の法に於て患觀に住するものは愛滅す」とあり、取と愛との相互關係を示している。すなわちこの経は愛_↓取の循環關係を説くものと云うことができる。

十二因縁は、「有によつて生あり」と云う「有_↓生」の關係を説いているが、俱舍論には中有・生有・本有・死有を述べて六道輪廻に於ける有の種を説いている。すなわち生有の中に属せしめている。また原始經典が作証を説く中で「生已に尽き所作已に弁じ、更に有を受けずと知る」とし、生の尽は有の滅であるとし、生_↓有の關係を示している。これ等によつて有_↓生の循環關係を示すものと云うことができる。

識・名色、受・愛、愛・取、有・生の關係が、それぞれ「識_↓名色」「受_↓愛」「愛_↓取」「有_↓生」の循環關係にあ

ると云うべきである。この循環関係は、同一状態の相互の連続的繰り返しを示すものであるから、触を中心として認識に基づくところの存在の熾盛性を示すものである。

三 サムムユッタに於て四食 cattaro āhāra が取り扱われている。四食とは搏食 kabalinkara-āhāra 触食 phassa-āhāra 意思食 manosañ-cetana-āhāra 識食 viññāna-āhāra である。āhāra は食または食物と訳されるが、また資糧の義である。この資糧は認識論上の資料と解すべきである。四食を五蘊に相当させるならば、搏食には細と麤とあり、認識の物質的資料であり、触食は認識に於ける関係構成的資料であり、五蘊に於ける受想二蘊に相当する。意思食は行蘊に識食は識蘊に相当する。色（触）受・想・行・識は認識の体系をなし、五蘊は、認識に基づく存在の聚合であるとするならば、四食は五蘊に相当する認識の資糧と云うことができる。四食が認識の資料であると共に五蘊に相当することは、因縁相応に「これ等の四食は、有情或は衆生の住し再生を求める資益の為にあり。」とし、次の様に釈している。

「搏食を知るとき五妙欲に於ける貪知らる。五妙欲に於ける貪を知るときその結なし。結によりて縛せられる聖弟子は再びこの界に還り来らん」

「触食を知るとき三受知らる。三受を知るとき聖弟子に更になすべきことなし。」

十二因縁に於ける認識と存在の問題（山 本）

「意思食を知るとき三愛知らる。三愛を知るとき聖弟子にありて更になすべきことなし。」

「識食を知るとき名色知らる。名色知らるとき、聖弟子に更になすべきことなし。」

とあり。食は認識の資糧の義に解され、これを正知することによつて存在性を離脱して「更になすべきことなし。」としている。有食経には搏食乃至識食に於て、「貪あり喜あり愛あり増長あるところに名色の顯現あり。名色の顯現あるところに諸行の増上あり。諸行の増上あるところに未来の後有の再生あり。未来の後有の再生あるところに未来の生老死あり。」とあり。貪・喜・愛は触によつて生ずるものであり、識住と名色とによつて触ありとすれば、触と貪喜愛との間に循環性が認められ、貪喜愛は諸行の増上であるから、この循環は存在性の循環と云うことができる。

四 四食は因縁相応では食品に於て説かれ、蘊相応では所食品に於て説かれている。すなわち食品の食経では食の因・集・生・起を愛に置き愛より受・触・六処・名色・識・行・無明に溯上している。すなわち四食より始つてその因・集・生・起を求めて「四食乃至無明」の逆観体系を説いている。また破群那経では「四食あり、有情若しは衆生をして住せしめ、生を摂受せしむ。」と云い、「識食は未来の再有再生の縁なり。それあるが故に六処あり、六処によりて触あり。」

とし、「識食乃至生老死」の順観の体系を説いている。この体系の初頭にある識食は四食を代表するものである。

食経の逆観と破群那経の順観の両体系によつて四食の循環的縁起が構成せられる。すなわち「四食—六処—触—受—愛—四食」となる筈である。四食の循環は認識と存在との熾盛性を現わしているものと云うべきである。これによつて前の四食は識^ナ名色における五蘊の認識系列を示し、後の四食は「取^ナ有^ナ生」の存在系列を示している。

五 因縁相応の触経には、「世間に老死を生ずる各種の苦は upadhi を因とし集とし生とし起とす。」と云い、「老死の集滅、老死の滅に趣く道跡を知ることとは、法に契いて行ずるものなり。」とあり。また老死等を知することは億波提^{ウパデ}を知ることであり、億波提を愛に縁るとして、「愛—億波提—老死」の系列を挙げている。愛は眼耳鼻舌身意に於て、常・樂・我・無病・安穩なりと見る所に愛の増長があるとしている。愛は眼等の六内処に於ける接觸關係（内触）すなわち antarāhi sammasati 中間触知によつて起り、この悪認識に基づき億波提を生じ、億波提によつて生・老死・愁悲苦憂惱を生ずるとしている。億波提は十二因縁に於ける「取—有—生」に相当する。すなわち悪認識に基づき生・老死に至る存在 bhava であり、註には億波提 upadhi は五蘊であるとしている。

愛を増長するのは苦を増長し、苦を解脱することを得な

いが、「愛を捨離するものは億波提を捨離し、苦を捨離し、苦を解脱する。」とせられる。愛を捨離するとは眼乃至意の認識内容を無常無我病怖畏と見ることであるとしている。

S. 12. 31-32 Bhūtam には「こは生ぜるもの bhūta なりと如実に正慧によりて見る。如実に生ずるものなりと如実に正慧によりて見て、生ぜるものの厭離・離貪・滅を行ずるなり。」「そは食生なりと如実に正慧によりて見る。如実に正慧によりて見て、食生の厭離・離貪・滅を行ずるなり。」「その食の滅することより、生ぜるものは滅法なりと如実に正慧によりて見る。如実に正慧によりて見て、生ぜるものの厭離・離貪・滅・無取著・解脱あるなり。」とある。

生ぜるもの bhūta とは五蘊のことであり、五蘊の如実知見を、その生ぜるものとその食生と食滅の三段階によつて説いたのである。食生の食は「識^ナ名色」の認識資料であり、食滅に於ける食は「取—有—生」に於ける存在の資料である。

bhūta は bhavati の P. P. であり、真実または生ぜるものの義であり、漢訳では真実と訳されている。「生ぜるもの」「真実」と訳されることは、空の裏付によつて存在するもの、すなわち「仮」の意味である。実存哲学に於ける existenz は「外に出る」すなわち生ずるの義である。よつて bhūta は仏教に於ける実存の意味である。